

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

(和文) 東アジア伝統医療文化の多角的考察

(英文) Study on various aspects of traditional medical culture in East Asia

2. 研究代表者氏名

大形徹

3. 研究期間

2014 年 04 月 - 2017 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

東アジアの伝統医療は、鍼術、灸法、按摩マッサージ、骨接ぎの諸技法、方剤調合を中心とする薬物療法を中心として大いに発展し、道教、仏教、陰陽道における宗教的な呪法、内丹、瞑想等の身体技法、あるいは世俗に流行した長寿達成の養生術、丹薬、年中行事に組み込まれていく民間信仰等々と相互連環することで特有の文化複合体を構築してきた。そこで、伝統医療文化を総合的に研究するためのフレームワークとして、医学史家だけではなく、現代医薬学の専門家や臨床医、鍼灸師と思想、宗教、科学の諸分野で文献研究を推進する研究者を一堂に集めて、文理横断的な視点から多角的、複眼的な考察を繰り広げ、医療文化の総体に構造的把握を試み、理論的特質や可能性を探る。そして、日中韓三国の伝統医学や医学史研究の現状を踏まえて、統合医療、チーム医療といった今日的な動向のなかで鍼灸医術や漢方薬研究が歩むべき道を討議し、伝統医学の立場から医療文化の未来像を提言する。

5. 本年度の研究実施状況

東アジア伝統医療の全体像とその文化的特色を構造的に把握するために、医者、鍼灸師、薬剤師、医学史研究者に加えて諸領域の人文学研究者を結集して研究集会を開催し、多彩なゲストスピーカーによる特別講演、班員による研究発表や『医心方』の会読を行った。本年度に取り上げた研究課題は、美容術における鍼灸医術、臨床から見た経穴説、煉丹術の身体技法、喫茶文化と養生などであり、著名な医学史家を特別講師に招いて伝統医学研究の最前線と今後の課題を討議した。2014 年 7 月 21-23 日に韓国科学技術院 (KAIST) の申東源副教授を招聘して国際ワークショップ(総合テーマ「東医宝鑑に見る日韓医学交流」)を開催し、特別講演、研究発表や附属図書館富士川文庫の調査、眼科・外科歴史博物館の見学を行った。また、社会啓蒙活動として、11 月 1-3 日に京都半井家、京都医学史研究会等と協力して護王神社護王会館にて京都医学史展 2014 (第 22 回医療文化サロン展) を主催し、『医心方』関連資料を中心とする展示を通して伝統医学の歴史と現代的意義をアピ

ールした。

8. 共同研究会に関連した公表実績

＜公開シンポジウム＞ 2014年7月21-23日 第1回伝統医療文化国際ワークショップ
 （総合テーマ「東医宝鑑に見る日韓医学交流」） 2015年2月22日 第2回伝統医療文化
 国際シンポジウム 2015-2（総合テーマ「東アジアの「医」の聖典」） ＜展示会＞ 11月1-3
 日 京都医学史展 2014（第22回医療文化サロン展）（京都半井家、京都医学史研究会等と
 共催、護王神社護王会館） ＜雑誌記事＞ 武田時昌「伝統医療の文化多様性を探る」（『医
 道の日本』2014年4月号 Vol.73 No.4（847号） pp.162-163、研究会の紹介記事）

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機 関 数	参加人数					延べ人数				
		総 計	外 国 人	大 学 院 生	若 手 研 究 者	女 性 数	総 計	外 国 人	大 学 院 生	若 手 研 究 者	女 性 数
所内	1	3	0	0	0	1	13	1			6
学内(法人内)	1	13	7	9	1	7	26	18	13	2	19
国立大学	8	8	0	0	0	3	16				7
公立大学	3	9	2	5	2	3	19	2	6	2	4
私立大学	18	32	3	8	4	17	69	7	15	8	41
大学共同利 用機関法人	2	2	1	0	1	1	5	1		4	1
独立行政法 人等公的研 究機関	0	0	0	0	0	0					
民間機関	3	5	1			2	17	2			7
外国機関	3	3	2				3	2			
その他	12	34			2	19	83	0		2	34
計	51	109	16	22	10	53	251	33	34	18	119

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	0
国際学術誌に掲載された論文数	0

※（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載

論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合

役割	
総論文数	0
国際学術誌に掲載された論文数	0

※ () 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載

高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由			
掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

